

## 1. 西二口町と吉原釜屋町

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/4804">http://hdl.handle.net/2297/4804</a>

# 1. 西二口町と吉原釜屋町

鹿野勝彦

- I はじめに
- II 西二口町と吉原釜屋町
- III おわりに

## I はじめに

本報告は、金沢大学文学部文化人類学研究室が、1990年度に3年次学生の調査実習として行った、石川県能美郡根上町の2つの集落、西二口町と吉原釜屋町における調査の報告書である。当研究室の実習調査報告書としては6冊目にあたり、その2冊目以降、実習そのものの目的、方法や、報告書発行の意図については、ほぼ一貫しているので、ここではあえてくりかえすことはしない。<sup>1)</sup>ただ、1990年度は、3年次学生の数が12名と例年になく多かったため、学生を2班に分け、各々が別の集落を調査対象とすることにした点が、従来と異なっている。

ここで対象とした集落は、後述するように一方が海岸部、一方がやや内陸の手取川扇状地と、立地条件が異なるにせよ（この差異は2つの対象集落を選定する際の、基本的なポイントであった）現在では同一の行政単位に属しており、直線距離でも約2.5キロメートルしか離れていない。また、調査活動の中心となった1990年7月の本調査においては、2班とも同時期に同一宿舎に滞在していた。したがって、必然的に異なる班のメンバー間で、情報交換、データの比較が、ひんばんに行われることとなった。このことは、報告書の内容に実際にどれだけ反映されたかは別として、学生各々が自分のテーマを考えてゆく上で、一定の刺激を与える結果となったように思われる。

本報告書でも、以下の各報告は調査参加者の関心に基いて執筆されているので、全体として2つの対象集落についての網羅的記述がなされているわけではない。しかし根上町の歴史や現状については、すでに1巻本の町史が発行され、また現在は数巻の大部な町史の編集作業が進められているし、特に西二口町については500ページをこえる集落史が刊行されている<sup>2)</sup>。したがって本稿では、以下の各論の前提となる、2つの対象集落についての最小限の基礎的記述と、そこから導きだされた若干の視点の提示を行うにとどめる。

## II 西二口町と吉原釜屋町

行政的には、西二口町は旧福江村、吉原釜屋町は旧釜屋村に属していたが、両村は1907（明治

40)年に江ノ島村と合併して根上村となり、同村は1934(昭和9)年町制に移行し、根上町は1956(昭和31)年には吉田村の一部を編入して現在に至っている。現在、同町は福岡、浜の2つの小学校々区に分かれているが、西二口町は福岡校区、吉原釜屋町は浜校区に属している。立地的には、前者は手取川左岸の低平地に位置し、水稻耕作には好適な地域である反面、近年まで手取川氾濫の被害もひんぱんに受けたのに対し、後者は海岸に発展した砂丘の後面に位置する海浜集落である(巻頭地図参照)。

両町の成立年代やその契機、歴史等については『根上町史』等に記述があるが<sup>3)</sup>、近代以降における人口、世帯数の変化を各種資料からまとめると、表-1のようになる。

また、両町の重要な生業である(ないしはあった)農業のありかたを示す資料として、1960年以降最近までの農家数とその種別の変化をまとめると、表-2のようになる。

西二口町は、もともと水稻耕作を基本的な生業とする農業集落であったが、表-1、2からもあきらかなように、1960年代に急速に世帯数、人口が増加する反面、農家数はほぼ停滞しており、かつ2種兼業化の傾向も著しい。したがって集落の生業基盤としての農業の地位が相対的に低下するとともに、地区内での機業を中心とする自営業や、地区外への通勤などの重要性が増加してきた。この間の人口、世帯数の増加は、その大部分が地区外からの転入によっているが、それらの人々はもっぱら農業以外の職業に従事している。このような変化は、1970年代以降現在まで、なおある程度続いている。

表-1 人口と世帯数の変化

年 度	西 二 口 町		吉 原 釜 屋 町	
	人 口	世 帯 数	人 口	世 帯 数
1875 (明9)	231	47	187	36
1888 ( 22)	256	46	182	40
1932 (昭7)	269	53		
1943 ( 18)	273	50		
1960 ( 35)	264	53	236	46
1965 ( 40)	267	57	276	53
1970 ( 45)	398	90	295	57
1975 ( 50)	434	102	288	59
1980 ( 55)	459	107	291	69
1990 (平2)	472	109	289	69

資料 1875~1943 『根上町史』  
 1960 『農業センサス』1970  
 1965~1980 『市町村地区別世帯及び人口概数』  
 1990 町役場人口統計(5月末)

表-2 農家とその経営形態の変化

年 度	西 二 口 町				吉 原 釜 屋 町			
	農家	専業	1種兼業	2種兼業	農家	専業	1種兼業	2種兼業
1960 (昭35)	42	3	21	18	39	3	19	17
1965 ( 40)	40				36			
1970 ( 45)	39	0	7	32	36	2	5	29
1975 ( 50)	45	0	4	41	31	4	2	25
1980 ( 55)	43	0	5	38	33	2	1	30
1985 ( 60)	35	0	2	33	30	2	2	26

資料 『農業センサス』1970、1985

もっとも西二口町の生業構造は、明治初期の段階においても機織や商業など、意外なほどに多様性に富んでおり（2章・鏡味論文参照）、したがってその当時においてすら西二口を純農家と把えることは、当を得ないであろう。このような背景のもとで、西二口という集落がたどってきた生業の変遷や、その過程での地区の社会組織、社会関係をどのように考えるか、また地区外からの転入者が地区にどのように統合されているか、地区外との関係はどのようなものであるか、といった問題が、西二口町を対象とする各論のうちのいくつかの出発点となっている。

一方、吉原釜屋町は、砂丘後背地という水稻耕作にはやや恵まれない立地条件の下で、かつては畑作とともに沿岸漁業や水運業（特に「小廻り」と通称された200石以下の船による廻船業）が、主要な生業をなしていた。しかし内外のさまざまな変化の下で、水運業は1930年代には、漁業も1950年代にはほぼ終息している。一方、農業面では1920年代から灌漑用井戸の鑿井、用水の導入などにより、畑地の水田化が進み、畑作地域としての特色は失なわれた。さらに、近年はこの地区の海岸部一帯は、北陸自動車道及び主要地方道（いわゆる産業道路）が縦貫したことにより、工場の進出が相継ぎ、景観はほとんど一変したといわれる。特に吉原釜屋町では集落の西北（海岸より）と中央部を二本の道路がほぼ平行して貫いたことにより、その影響は著しく、地区内には住民の経営する鉄工場などが建設された他、地区外からの大規模な工場の進出もなされている。しかし、表-1、2に見るように、地区外からの人口の転入はそれほど多くなく、むしろ人口、世帯増の大半は従来からの住民の分出によっている。したがってここでも吉原釜屋の海浜集落としての特性が時代とともにどのように変化し、それが地区の社会のありかたとどうかかわっているか、また地区外との関係においてはどうか、といった問題が、各論においてとりあげられることとなった。

ところで根上町を含む能美郡一帯は、周知のように、宗教的には浄土真宗の影響力が、現在も強固な地域であり、その点では対象とした西二口町、吉原釜屋町も例外ではない。ただ、両集落を構成するイエとその「お手次」の寺院との関係は、必ずしも単純ではない（表-3参照）。

このうち西二口町では、在来からのイエはほとんどが真宗大谷派に属しているが、その約半数は金沢専光寺の門徒であり、集落内にある安受寺を「お手次」とするイエはその約2分の1にすぎない。そして、この資料の作成された1970年前後<sup>4)</sup>の戸数は90戸であるから、全戸の40パーセント以上の世帯（ほぼ地区外からの転入世帯と思われる）の、宗派、寺院との関係は、在来のイエのそれと

表-3 手次寺と門徒世帯数

手次寺	西二口町	吉原釜屋町
金沢 専光寺	27	1
西二口 安受寺	14	
小松 西照寺	8	14
本覚寺		3
教恩寺		3
本蓮寺	1	
浄誓寺		2
金平寺	1	
三国 称名寺		27
大阪 昭台寺	1	
計	52	50

資料 『根上町史』 P 678~683

はあまりかかわりが無いことも推測される。一方、吉原釜屋町の場合、住民は宗派的には真宗大谷派と高田派（「お手次」寺は三国称名寺）とに二分されるが、そのうち後者は草分け的なイエの過半数を含む<sup>5)</sup>、全戸の約50パーセントを占めており、この点も集落の1つの特色となっている。また、宗教活動は、具体的にはさまざまなレベルで行なわれる「講」において、もっとも日常的、かつ活発な様相が見られる。しばしばそれは各集落の範囲をこえ、また単なる宗教活動の枠を越えた、社会的な娯楽の場でもある。一方、集落に鎮座する神社（西二口町も、吉原釜屋町もたまたま春日神社を集落の神社とする）での年中行事としての祭礼や、その他の催事等においても、地区の人々の社会関係やそれを支える意識などは、さまざまな形で表現される。とりわけ個々人のたどる人生の各段階や、そこでの通過儀礼（たとえば「厄の祝い」）と、神社に代表される集落社会とのかかわりは、若干の各論で取りあげられたように、私達の注目をひいた問題であった。これらの問題を扱う場合、一応、1つの集落を考察の主な対象としたとしても、実際には半ば必然的に視野をひろげ、比較の視点を取り入れざるをえないことになる。そのような作業を通じてはじめて、個々の集落において見られる宗教、儀礼活動や、ひいては集落そのもののもつ独自性と、地域の文化の中での一般性とが、あきらかになるはずだからである。

### Ⅲ おわりに

本報告書で、上にのべたような視点が、実際の報告の中で表現されたかといえ、残念ながらきわめて不十分でしかないことは認めざるをえない。このことは、一に報告者、指導者の力不足による。そのことを承知の上で、あえてささやかな報告書を発刊するのは、それが結論を提示するというより、むしろそれによって調査に協力して頂いた根上町、とりわけ西二口町、吉原釜屋町の方々のご批判、ご意見を受けるきっかけを作り、そのことを通じて私達の理解をより深めるために他ならない。そのような作業の積み重ねは、今回に限らず、文化人類学研究室の継続的な課題であると、私達は考えている。

#### 注

- 1) 金沢大学文化人類学研究室の報告書としては、これまで『現代における伝統－加賀友禅の研究』（1983）、『変容する漁村－姫』（1985）、『郊外化する農山村－鍋谷』（1987）、『町野町金蔵－文化人類学の視点から』（1989）、『双子の集落－石川県鳳至郡柳田村、寺分・五郎左衛門分』（1990）がある。研究室としての実習の目的、方法や報告書発行の意図については、上記『町野町金蔵』のP. 1～2にのべておいた。
- 2) 『根上町史』昭和49年、及び『二口町史』昭和59年。
- 3) 西二口町については『根上町史』P. 1326以降、『二口町史』P. 27以降、吉原釜屋町については『根上町史』P. 1450以降参照。
- 4) 資料自体の調査年次はあきらかでないが、出所である『根上町史』の発行は1974（昭和49）年である。
- 5) 『根上町史』P. 1450～51。